

外来エコーセンター

● スタッフ（平成30年10月1日現在）

センター長 小田原 雅人

● 部門の特徴

放射線被曝がなくヨード・ガドリニウム造影剤は使用しない無侵襲画像検査法の代表である超音波検査。年々増加する検査ニーズに合わせ、高機能ハイエンドマシンおよび専門スタッフ（超音波検査士）を集中化、必要時に速やかな検査を実施する体制を目指している。CTやMRI同様、超音波イメージを用いたファーストラインの画像部門の位置づけである。年間検査件数は16,000件強で、体表、消化器、泌尿器、婦人科、血管領域などの形態学的検査を主とする。画像検査における“ultrasound first”はいまや世界の潮流であり、今後ますますの需要が見込まれる。

● 部門の特殊性

RIS（放射線情報システム）で運用、完全フィルムレス環境を構築している。高分解能Bモード、高感度ドプラ、エラストグラフィ、フュージョン機能など様々な特殊オーダーに対応、DICOM型式で、PACS（画像保存通信システム）を介して院内に配信される。画像は検査後数分で各クライアント端末で参照可能（報告書は翌日）。また他モダリティとはQ/R（query and retrieve）システムでリンクし、偶発病変のガイドやナビゲーションイメージに利用している（図1）。

● アピールポイント

放射線科医、超音波検査士が中心となり放射線医学教室の指導のもと、スケールメリットを活かした運営を行っている。検査は領域認定資格（乳腺、甲状腺、表在、泌尿器、消化器、脈管）を有するソノグラファーが担当、病変の検出のみならず、病期の判定、手術適応の有無、治療効果判定などの有用な情報を提供すべく取り組んでいる。また教育機関として、他科医師および他施設スタッフの研修も積極的に受け入れている。

● 検査実績

検査項目は乳腺、甲状腺、頭頸部、体表系が半分を占め、尿路系、血管系検査がつづいている（図2）。近年増加が目立つのは領域リンパ節評価、皮膚・皮下領域深達度評価、末梢神経、遊離皮弁用穿通枝検索など治療に直結したものである。年間総検査件数は、2010年度の開設時より年間平均で約8%（1.0～23.7）ずつ増加している（図3）。

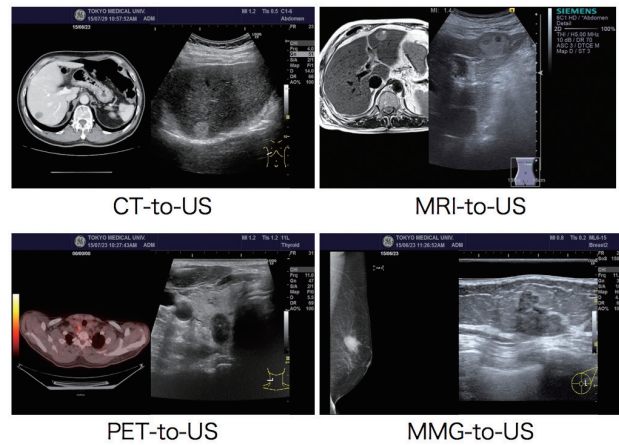


図1 DICOM・Q/Rを利用した参照画像

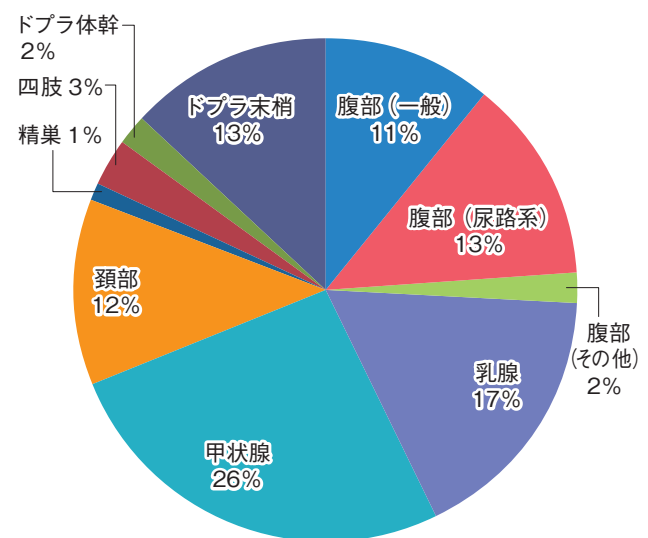


図2 2018年度検査内容の内訳 (%)

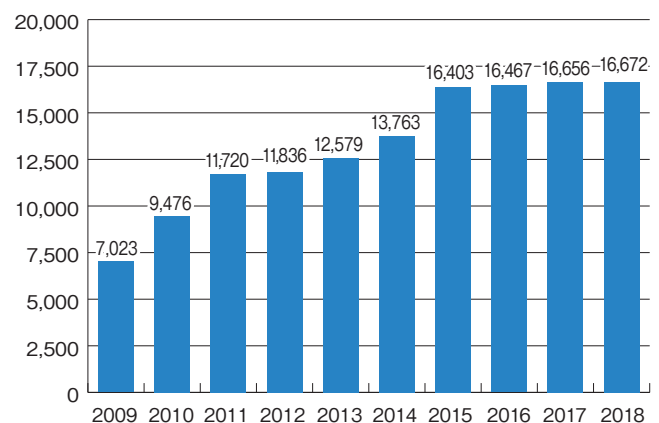


図3 年間総検査の推移 (件)